〔狐話〕

その一

おれは明治四十二年の生れだがら、深沢の分校に入ったのは、大正五年頃でねがや。学校から帰って来るどてお宮のどご回れば狐にだまされだものだ。お宮の方行けば近い訳だ。新道ぐるっと回るよりポチッと行ぐにえがら。せばかならず狐につかれるんだ。腹痛ぐなって、

「おー腹っこ痛でな、腹っこ痛でな」

ってせば

「まだが、まだがどご来た」

って言われるおな。

「まだなして人といっしょにこっちこね」

たて、ほれ人数足りねがら、一人で帰るごともあるし、皆と団体で帰るどどそうねえのやな。そいでおばあさんも、使われているめらしどもおべでしまって、

「どご来た、まだがまだが」

ていって、

「まで、おれナンバン焼いで鼻さいびりこんでける」

なんて言われれば、

「あー、あどなんてもね」

ってけろっとなおるおだおな。

それから焼火箸、ほど（いろりの中央）さいびりこんでよ、おれど押さえでおいでよ、

「まで、今鼻さ焼火箸いびりこんでやら」

てば

「やめでけれ、あどえ、なおった、なおった」

てあどえくなるおだった。せばきつねはなえて行くおな。人どごバガにしてつでくるおだ。